

琉球の古鐘とその銘文
〔一〕

仲嶺真信

はじめに

ここにいう琉球の古鐘とは、そのほとんどが、慶長十四年島津氏による琉球征討以前に独自の海外貿易による繁栄を誇っていた琉球王国の下で製造された梵鐘を意味する。

かつて、梵鐘研究家の坪井良平氏はその労作の著『日本の梵鐘』（角川書店・昭和四十五年）・『日本古鐘銘集成』（角川書店・昭和四十七年）等の中で、琉球の古鐘についての紹介と若干の言及を試みたわけだが、それについて筆者の現地調査を踏まえての見解をのべると、いまだ不十分であり、又、誤まりも多少みられるので、問題は相当多く残されているといわざるをえない。琉球の古鐘についての研究は、この他に東恩納寛惇氏の「百里城正殿奉掛梵鐘について」（『史蹟名勝天然紀念物』第十八集第二号）や、外間正幸氏の「琉球の梵鐘について」（『一九六一年度文化財要覧』等）があげられるが、やはり梵鐘一般の問題からながめると、いまだ十分であるとはいいがたい。筆者が今筆をとらんとしたのは、誤解を修し、若干の問題について言及しておく必要にせまられたからであり、又今後の琉球の古鐘についての研究の上で、誤まりのない鐘銘資料を提供したいと考えたからである。

一 琉球鐘の特徴

琉球鐘といつても作風はほとんど和鐘と同一形式であるが、記銘の方法において、和鐘と若干異なる点がある。すなわち、一、紀年の記載方法がすべて中国年号と同一（朝鮮鐘の場合と同じ）。二、琉球国王の名

称を記す。三、掛け置く場所も寺院以外に、王城もしくは、道教祠等がみられる。

一方、古鐘の鑄造時期については、後記の一覧表にもみられるように、景泰七年（一四五六）から康熙三十六年（一六九七）までであるが、そのほとんどが景泰七年から弘治九年（一四九六）までの約四十年間に集中している。つまり、それは、琉球国王尚泰久から尚徳王をへて、尚真王の治世時期に相当する。中でも、尚泰久王期の鑄造になる古鐘は、後述するように約二十三基と、現在確認できうる古鐘総計の半数以上になる。景泰七年銘鐘から天順三年銘鐘までの約四年間に、この二十三基が造られているわけであるから、当時の尚泰久王の権力の伸展及びその庇護の下にある寺院の繁栄ぶりがうかがえよう。

二 琉球鐘の存否について

現在確認をされうる古鐘数については『琉球国由来記』・『琉球国旧記』等の文献を基にして作成した後掲の古鐘一覧表を参照すれば、左記の通りである。

一、現存鐘十四基	有銘鐘十三基
	無銘鐘一基（護国寺蔵）
二、逸亡鐘二十二基	有銘鐘十六基
	無銘鐘六基

以上、現存鐘、逸亡鐘の総計は三十六基となるが、その半数以上が、その姿を確認することのできない逸亡鐘である。いかに数多くの古鐘が何らかの事情により散逸してしまったかが分る。その最大の理由は、

今次大戦の際の金属回収に伴う梵鐘の供出問題、及びその戦禍による破壊、損失等があげられよう。事実、琉球に唯一伝存していた朝鮮鐘は、みごと米軍の艦砲射撃により壊滅し、今はその竜頭の一部のみを残すだけである。数少ない高麗初期の鑄造になる優品であつただけに大変惜しい。

又、一方では、古くから廃寺、あるいは寺院の合併吸収等の問題が、文献にみられるが、その際に起こる様々な諸事情によつて、古鐘は所在不明もしくは旧所在をかえざるをえなくなり、別の寺に掛着、安置されるなど複雑な経緯をたどっているのが若干例みられる。

今回ここに紹介する相国寺鐘の場合は、梵鐘そのものは逸亡してしまつてはいるものの、幸いなことにその拓本資料が現存している例である。現在、この例にならうものは、万寿寺鐘が他に一つある。何れともに有銘鐘で、景泰七年、天順元年の紀年を有す尚泰久王代の鑄造になるものである。では、さっそく次に相国寺鐘について紹介したい。

(なお、本稿以降順次琉球の古鐘及びその銘文について紹介する予定でいる。)

三 相国寺鐘 (景泰七年) 銘について

(一) 銘文の紹介

相国寺鐘銘 (拓本・東恩納文庫蔵)

(久場政用氏手拓)

琉球国

王大世主庚寅慶生

茲現法王身量
大慈願海而新鑄洪
鐘以寄捨本州
(以上第一区銘)

相国禅寺上祝万歳
宝位下濟三界之群生
辱命本寺二世谿隱
安瀾叟為銘其銘曰
華鐘鑄就 掛着珠林
(以上第二区銘)

撞破昏夢 正誠
天心
君臣道合 蛩夷不侵
彰亮氏德 起追蠱吟
万古
(以上第三区銘)

皇沢流妙法音
景泰七年歲次 丙
九月廿三日
二世谿隱叟書之
奉行
大工
(以上第四区銘)

前掲銘文の原鐘銘については、図版①④参照のこと。

琉球古鐘一覽表

西曆	紀年銘	現所在	原鐘銘	文献照合及び備考
一四五六	景泰七	沖縄県立博物館	天竜精舎	[旧]「由」天王寺の条 [由] 廃寺
	〃	〃	普門禪寺	[由] 廃寺 [由] 普文寺村の条 其地嘗有「古寺」
	〃	〃	天尊殿	[由] 同上
	〃	北米・アナポリス 海軍兵学校	大安禪寺	[旧] 護国寺の条 [由] 廃寺 模鐘・琉球大学構内蔵
	〃	(逸亡)	相国禪寺	[由]「旧」神応寺の条 拓本東恩納文庫蔵
		(〃)	長寿禪寺	[由]「旧」同上
		(〃)	建善禪寺	[由]「旧」同上
		(〃)	広嚴覚宮	[由]「旧」同上
		(〃)	(広嚴禪寺)	
		(〃)	報恩寺	[由] 公私廃寺本尊併鐘事の条
		(〃)	大聖寺	[由] 同上
		沖縄県立博物館	(下)天妃宮	
		〃	霊応寺	[由] 同上
		〃	竜翔寺	[由] 廃寺
		糸満市中央公民館	(上)天妃宮	[由] 同上
		(逸亡)		
一四五七	景泰八 (天順元)			

一四九七	康熙三十六	沖繩県立博物館	巴覚禪寺 (再鑄大鐘)	〔由〕同上
一四九六	弘治九	(逸亡)	巴覚禪寺 (楼鐘)	〔由〕同上
一四九五	弘治八	沖繩県立博物館	巴覚禪寺 (殿前鐘)	〔由〕同上
一四六九	成化五	(逸亡)	相国禪寺	〔由〕天界寺の条 〔中山世譜〕卷五
一四六六	成化二	沖繩県金武村 觀音寺	天界禪寺	〔由〕護国寺の条
一四五九	天順三	(逸亡)	東光寺	〔由〕廢寺
一四五八	天順二	沖繩県立博物館 (逸亡)	永代院	〔由〕廢寺
〃	天順元	(〃)	中山国王殿	〔由〕變密門 (康熙十)
		(〃)	万寿禪寺	〔旧〕同上
		(〃)	潮音寺	拓本東恩納文庫蔵
		(〃)	魏古城	東恩納論文紹介
		(〃)	大禪寺	〔由〕廢寺
		(〃)	永福寺	〔由〕廢寺

〔由〕廢寺
大正十四年啓明会主催琉球芸術展覽会所見
〔日本古鐘銘集成〕による)

〔由〕廢寺
〔由〕「旧」安国寺の条
〔由〕廢寺、「旧」聖現寺の条、拓本東恩納文庫蔵(坪井本による)
しかし、筆者調査の際には確認できず

※「由」は「琉球国由来記」
「旧」は「琉球国旧記」の略

(二) 「琉球国王大世主」と「谿隱安瀧叟」

さて、前掲の銘文中から「琉球国王大世主」と「谿隱安瀧叟」の二人物に問題を絞って若干の言及を試みることにしよう。

この両者の関係には、極めて重要な問題が内包されている。すなわち、景泰七年（一四五六）から天順三年（一四五九）までの有銘鐘十七基の全てに、両者の名称が検出される。これは現在確認されうる古鐘総計三十六基の中で考えてみると約半数程になり、相当の割合になる。更に「谿隱」にのみ限って、その名称を記す古鐘数を確認すると、十九基程になるので、古鐘総計の半数以上が含まれることになり、大変興味深い問題を提起する。

『中山世譜』巻五、尚泰久王の条には次の記事がみられる。すなわち、

「景泰年間。一僧至_レ国。諱承琥。字芥隱。日本平安城人也。

王命_二輔臣。新構_三三寺_一。一日_二広蔽_一。（今存）一日_二普門_一。一

日_二天竜_一。（俱今不_レ存）

令_下芥隱和尚。為_三開山正住持_一。而輪流居_上焉。王受_三其教_一。礼待甚優。而国人崇_レ仏重_レ僧。由_レ是。王大喜。景泰・天順間。卜_二地于各処_一。多建_二寺院_一。并鑄_二巨鐘_一。懸_二于各寺_一。朝夕令_下諸僧。談經說法。參禪礼仏。以祈_レ昇平之治_上。

雖_二漢明・梁武_一。亦無_三能出_二于其右_一焉。誠此我国仏法文明君也。（即今禁中。或寺廟。所_レ有巨鐘。乃景泰・天順年間。尚泰久王所_レ鑄也）

王又命_二輔臣_一。創建_二末吉山熊野權現社_一。（其余神社。何年建_レ之。今不_レ可_レ考。疑是泰久王之世。其亦建_レ之歟）

明、天順元年丁丑。王命_二輔臣_一。鑄_二天妃二廟及万寿禪寺等鐘_一。（以下省略）

又、一方『琉球国由来記』卷十・諸寺旧記の条、天徳山円覚寺開山国師行由記にも前掲記事と重複する部分がみられる。すなわち、

「師諱承琥、字芥隱。日本国平安城人也。為_二其人_一、容貌奇異、而虎視牛行也。乃悟_レ心（南禪寺塔頭也）始祖樞庭和尚之（字海壽、嗣_二仙_一）嗣、而実出_二于古林五世孫_一也。師一日謂_レ衆曰。吾聽、海南琉球者、雖_レ為_二小邦_一、人廉而有_二根器_一矣。已要_二南邁_一。然風便亦稀也。因來_二薩州宝福寺_一、（俗曰_二山寺_一）盤_二結一庵_一、（遺址猶在。曰_二琉球谷_一）觀_二時節因縁_一矣。遂景泰年中、踰_レ海越_レ漢、遠來_二茲土_一、為_二法求人_一。始_二国王_一尚泰久、嚮_二其道風_一、召詢_二法要_一也。師之横談豎説、大契_レ旨也。

尚泰久、歡喜之余、創_二箇々精舎_一、以歷住之也。謂_二広蔽、普門、天竜_一是也。後至_二於弘治年間_一、尚真王、亦大帰仰也。故勅_二創円覚伽藍_一、延以為_二第一祖_一也。其平昔也、儉朴精勤、克振_二其業_一。迨_二化縁既尽_一、示_二微恙_一而遷化矣。時当_二弘治八乙卯五月十六日_一也。建_二牌於方丈_一矣。後至_二于康熙三十三甲戌_一、当_二二百年遠忌之辰_一也。由_レ是山之僧蘭田、具_二訴状於陛下_一、而勅_二諡佛智圓融國師_一。了道撰_二拳_一先是、康熙二十六丁卯季春、住持石峰、相議、而使_二門中抽_二資財_一、

始現「出干開山国師之土像」也。(以下省略)

以上、二つの記事を右に掲げたが、の中には「尚泰久王」と「芥隠」との密接な関係がうかがわれる。つまり、「尚泰久王」が、「僧・芥隠」に帰仰し諸寺を開かせ、仏教国として琉球国を繁栄発展させんとしてゐることが知られる。相国寺鐘銘中にみえる「大世主」とは、尚泰久王の称号であり、彼の人柄は、「性質英厚。国衆帰心」(中山世譜)巻五・尚泰久王の条)と記される。

一方、前掲記事中の「承琥(諱)芥隠(字)」については、両記事をまとめてみると、日本国平安城人であり、人柄は容貌奇異で虎視牛行である。彼は南禅寺椿庭和尚の法嗣で、古林清茂から第五世の孫嗣に当る。景泰年中、渡琉したところ、時の国王尚泰久及び尚真等に厚遇され深く帰依を受け、諸寺を開くことになった。ところが、遂に弘治八年に遷化し、康熙三十三年の二百年遠忌に際し諡号を佛智圓融國師と名づけられたことが知られる。

さて、「承琥・芥隠」の開山した広嚴・普門・天竜の三寺に掛着された古鐘について考えてみよう。

現存するのは、普門寺、天竜寺の二鐘のみである。前者の鐘銘には「相国安濤」が銘をなし「開山承琥証之」となっており、一方、後者の鐘銘には「相国安濤」が銘をなし、「古林第五世法孫開基沙門承琥謹記」となっており、両者は前掲記事にみられる「承琥」が普門・天竜の二寺を開基した事実を裏づけていると指摘できよう。更に本稿の中心となる相国寺鐘には「本寺二世谿隱安濤叟」が銘をなし「二世谿隱書之」となっている。ここに至り、やっと「谿隱安濤叟」と前記の「承

琥・芥隠」との何らかのつながりが考えられる。先に結論をいえば、つまり、「芥隠・承琥」と「谿隱安濤叟」とは、同一人物を示すものといえよう。なぜなら、「芥隠」と「谿隱」とは上一字の違いであるが、「芥」と「谿」とは共に「カイ」と発音できるからである。因に、「カイイン」と読める字を古鐘銘中から二例拾うと、一、「蹊隱」(二品権現鐘)二、「溪隱」(竜翔寺鐘・中山国王殿鐘)等があげられるが、何れの場合にも同一人物を示していると考えられる。又、「谿隱安濤叟」と記される場合、「芥隠承琥」の表記と同様に「カイイン」以下の名称は、別号と考えられる。

以上のように、鐘銘中にみえる「谿隱」、「溪隱」、「蹊隱」あるいは「安濤」、「承琥」等と記される同一僧の手になる撰文が、かなりの数、鐘銘として記載されているところから考えると、彼は当時の琉球国王の手厚い庇護の下で、「偈」を創るような相当重要な役職を担っていたといえよう。

(未完以下つづく)

相国寺鐘
(景泰七年)
銘・拓本資料

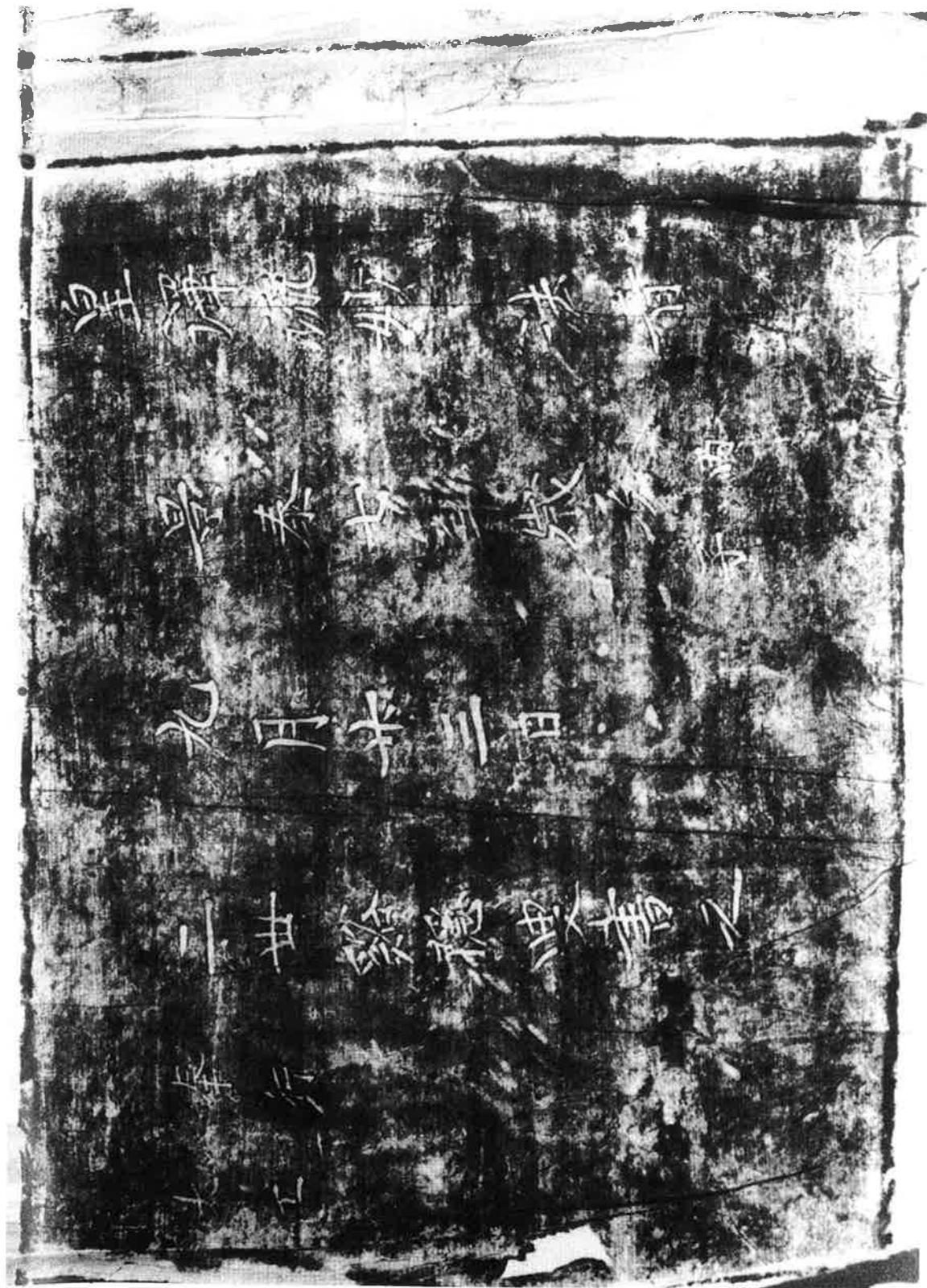




图版② 第二区铭



天心
萬世
萬世
萬世
萬世



图版④ 第四区铭